「災害社会学」の文・大矢根ゼミ

台湾で日本の古民家移築に協力

大雨被災地で聞き取り調査も

▲ 作業に取り組む
▼ ゼミ生の皆さん

◀ 移築作業途中の古民家の全景

大矢根淳文学部教授（災害社会学）のゼミは、阪神・淡路大震災後のまちづくりを支援する「まち・コミュニケーション（以下、まち・コミ）」と交流し毎年、神戸市長田区の御蔵地区を訪れ、震災後の生活再建について聞き取り調査を行っている。

この地区では、2004年に古民家を移築。自治会館として再生し、人々の憩いの場となっている。「建物の復興は進んでいるが、失われた関係性は戻ってこない。木のぬくもりのある古民家には、共通の懐かしさを取り戻させる力があり、シンボル的な存在になる」と大矢根教授は言う。

「まち・コミ」は、台湾中部の大地震（1999年）の被災地と交流があり、古民家の効用を知った現地の関係者から、「ぜひ台湾にも古民家を」との申し出を受け、台北県淡水鎮の平和記念公園の一角に福井県の古民家を解体し移築する計画が始まった。

同ゼミで「お世話になっている方々に恩返しをしたい」と話がまとまり、尾田佳南子さん、川島健太郎さん、宮下真優奈さん、天野舞さん（以上3年次）、同教授の社会調査実習を履修している吉村仁さん（2年次）が8月22日から28日まで、信田愛美さん、齋藤久美子さん（2年次）が8月初旬に台北に渡り、ボランティアに参加。土壁塗りや、材木の運搬などを手伝った。作業のほかにも、今夏、大雨被害のあった被災地（高雄近辺）で聞き取り調査を行い、取材を受けた地元新聞社の記者に「逆インタビュー」するなど貴重な経験をしてきた学生たちに感想を聞いた。

「単語をつなげた英語や筆談でコミュニケーションでき、『伝えたい』気持ちがあれば、何とかなることが自信になった」（天野さん）、「現地の記者に教えてもらった、『笑顔で接する』インタビューの秘訣（ひけつ）を実践したい」（川島さん）、「高名な宮大工の方や左官の方から技術指導を受けたことと、『家は人生と同じ』という話が印象的だった」（尾田さん）、「協力してつくりあげる素晴らしさを知った」（宮下さん）。「日本側、台湾側双方の話をまとめているが、客観的に判断することが大切だと感じている」（吉村さん）。

「ひとつの事柄を違った角度から見ることで、事実の背景や要因を深く考えたりするようになるのが、社会学の魅力。今回の経験をもとに、いろいろな人とかかわりながら、能力を高めていきたい」と学生たちは、周囲の公園や道路が整備される来年3月ごろ、あらためて現地を訪れたいと計画している。

「まち・コミ」の活動詳細は、http://park15.wakwak.com/~m-comi/

▶ 感想を語り合うゼミ生の皆さん（右端が大矢根教授）

小学生も参加
中野島地区防災マップ充実に向け〝まち歩き〟

大矢根教授と大学院博士課程社会学専攻の横山順一さんが中心となり、08年度多摩区・3大学連携事業として「安全・安心な街づくり」に向けた防災マップを中野島地区防災委員会の方々と一緒に制作した。

この事業は今年度も継続して行っており、新たにノウハウを広めるため10月18日、瓜生英一多摩消防署副署長、中野島地区ジュニアリーダーの小学生5人も参加して、災害時に危険な場所、資源になりうるものを記録し、消火栓や備蓄倉庫の確認を行った＝写真。

今後検討を重ね、12月には、防災マップを完成させる予定。

「いのち」の便り展―兵士のこころと銃後の想い
―軍事郵便など150点展示―

「人間としての兵士たちの手紙」

文・新井　勝紘ゼミ

文学部人文学科歴史学専攻の新井勝紘ゼミ（伴野文亮ゼミ長・3年次、40人）は、軍事郵便の解読を行っている。兵士が、親しい人に送った手紙から戦争に対するどんな思いが読み取れるか――。兵士たちと、同世代の学生が軍事郵便を通して〝対話〟、その成果をまとめた展示会が向ヶ丘遊園駅近くの専修大学サテライトキャンパス（☎044・922・0992）で開催されている。題して「『いのち』の便り展―兵士のこころと銃後の想い―」。

新井ゼミは、アジア太平洋戦争中にビルマで戦死した川崎市出身の若い兵士が家族にあてた88通の手紙（「小泉書簡」）を読み、受け取り主を探り当てインタビューや兵士の墓参りを行い、2005年に生田キャンパスで展示会を催し話題を呼んだ。

2回目となる本展示会では「小泉書簡」のほか、満州（現在の中国東北部）から陸軍部隊の兵士が富山県の女性に送った「衣川書簡」、現在のゼミ生たちが読み進めている「綱島書簡」「石田書簡」「田邊書簡」のほか日露戦争時代の書簡など約100点が紹介されている。戦地に赴いた息子の戦死を伝える上官からの手紙が表装され、巻物となって保管された珍しいものもある。

また、慰問帳、雑誌、除隊記念・凱旋（がいせん）記念となる「軍猪口（ちょこ）」「軍隊杯」など、戦争と兵士にかかわるものもある。手紙類と合わせて150点が展示され、「軍事郵便の意義や〝歴史力〟を描き出した」（新井教授）展示会となった。

展示物は新井教授が収集したもので、本展の企画・展示のデザインなどは、すべてゼミ生たちの手による。

新井ゼミでは、軍事郵便を読む演習を7年前から行っている。新井教授は「戦時中の大切なコミュニケーション手段であり、生まれて初めて手紙を書いた兵士も多かったのでは。文面には過激な内容は見られないが、一般市民が経験した戦争がリアルに、素直に描かれ、貴重な資料も多い」とその価値を強調する。

伴野ゼミ長は「軍事郵便を読んだことで、戦争に対する認識が変わった」と言う。

▲ 展示された軍事郵便の数々

▲ 手紙をゼミ生に説明する新井教授（左）

読み進めている「石田書簡」は、満州に赴いた石田好弘さんが東京の高橋照子さんに送った手紙で内容は「戦場からのラブレター」です。

「…今こそはっきり言います。僕は照子ちゃんが好きなのです。決して銃後の一人の女性とは思えません。この世に唯一の照子様を愛しています。…」（書簡から）

「お国のために我が身を捧げて戦う兵士たちは、死ぬことが本望だった――と伝えられますが、すべての兵士がそんな勇ましくはなかったと思います。少なくとも、手紙からは読み取れません。一人の女性を愛する感情は、私たちと変わらない。一般的に伝えられる兵士像とは別の姿が、そこにありました」

家族を気遣い、愛する人を思い、人間としての感情が行間から伝わってくる手紙の数々。崩し字、旧カナ遣いの文面と悪戦苦闘しながら読み進めた兵士との〝対話〟。展示は11月21日まで行われる。

軍事郵便

戦時中、出征中の兵士や軍属などと本国の人との間で交わされた郵便物。もっぱら私信で、表には「軍事郵便」「検閲済み」のスタンプが押される。

『ケータイ世代が「軍事郵便」を読む』出版

文学部・新井ゼミは2003年から取り組んでいる軍事郵便解読の体験や成果を一冊の本にまとめた＝写真。

文面のちょっとしたヒントから関係者を探し当て、インタビューも成功させた「小泉書簡」と「衣川書簡」解読を中心に、ゼミ生たちの追体験がつづられている。

『ケータイ世代が「軍事郵便」を読む』（専修大学出版局・700円＋税）